

廿七日今朝種重の許へ消息して侍りける序に

思ひ出てけふも空しく暮さまし日かげうらゝに花匂ふ頃

此返し

身は斯て任せぬ世にし有ながら心は花になさであらめや

又申しおくりし

よしさらば昔の花を忍ばまし思ひ出るをおもひ出して

今日は忍ぶの岡の邊へ、いざなはれてまかるよし聞え

けるまゝ、圓覺院の花の陰、殊にゆかしき事の有ける

まゝ。

古へを忘れぬ花の陰とだにその木の下にことやつてまし

おもへたどあだに結びし夕霧を昔ながらの花にかこつと

歸雁

有明のかすみの袖にたち別れつれなくみゆる春の雁が音

見るまゝにうつす言葉のよしもがな霞に消る雁の玉づさ

歸る雁夜深き雨にしほれてや雲のいづこに鳴わたるらん

よしさらばの卑詠に種重返しとて

わすれんと思ふ昔を忍ぶこそ中々花のとがにぞありける

一、小野一實の許へ申遣るとて

廿九日、昨日行ずりの袖をかしきことありしまゝ、小野一實の許へ申遣して。

色に香に心ぞまよふあさもよひきのふの花の袖の行ずり

一昨日種重の許より、忍の岡の花一枝に『しのべ猶共に

に詠めし花のえだ春はむかしの春ならねども』と書そ

へてたうべけるまゝ返しに。

袖の露おきこそまされ山櫻むかしわすれぬ花のいろ香に

山櫻むかしながらの色に香にはるともしらぬ袖の露かな

日影さす山の樵柴夕さびてすそのゝきりに賜ぞ鳴くなる

一、文殊亭の櫻を詠める

三月三日文殊亭邊有老樹。櫻花色殊可賞。

一本の老木の花の色にこそとばかり四方の春もわすれて

朝日かげかすみに匂ふこそすゑよりちりくる花に鶯のこゑ

一、庭前の残櫻を

五日駒込の舊宅に至て、庭前の残櫻を賞す。

来てみれば蘆の中垣ひまあれて葎がうへに花ぞちりける

ちりはて、青葉に残る面影の花のかたみにしたふ朝つゆ

今夜夜東叡山日門主御葬禮あり。御歳もはたちに七と

せ斗り餘らせ給ふよしなれば、殊更御いたましき御事に

に思ひとり奉る。ゆうべかの思ひのけふりとなし奉る

事、扱しものと僧徒の心もおしはかり思ふあまりに。

残れかし霞にたがふ夕けぶりそをだに後の春のかたみに

山風に消て跡なき夕けぶり花はあだなるものとやは見む

是やこの花のうてなと仰ぎみん櫻ちりしく法のさむしる

落花の意を

ちる花に風も色ある 朝哉

よしさらばちらば散なん散とて忘れん春の花の蔭かは

梢こそあらぬ緑に移れども花のいろ香のわすれやはする

一、夢得の句その他

廿二日夜分夢得の句

咲初て匂ひに残れ宿の梅

右の句に脇、第三作之

鶯來 鳴く軒の 春雨

かすみゆく雲の氣色に 風絶て

三月盡

藤波のかゝれる松の下露やはかなく暮てかへるはるかな

四月朔薄暮の頃郭公を聞て

ほとゝぎす夢か現かまよひにきいま一聲に初音さだめよ

ほとゝぎすうはの空なる一聲に幾夕ぐれの花もわすれき

一、菊池武康旅行の句

四月八日菊池武康、此度旅行の佳作扇子にしるしおける。

彌生廿六日家路別る時に

行春よ旅立空にいざゝらば

かへり見がちに行きくへて、くりから山越果るとて。

霞みしが跡は重なる峰の雲

名立山越るとて海原の晴たるを見て。

海晴て朝日に見ゆる霞哉

彌生晦日越後關山にて雨降りければ。

雨となり雲とや空に暮の春

卯月朔室館の山中に、片枝若葉の花を見て。

春夏を花も片枝に若葉哉

又盛なるを看て。

夏たつもしらぬ山路や花盛

小松原と云所に至りて、山のかたはらに小松生て、つ